

初辰まいり

大阪では商売繁盛を祈願して住吉大社を訪れる人が多い。毎月行われる祭事は「初辰まいり」と呼ばれ、これを行うと、商売繁盛につながると信じられている。初辰まいりは、大阪が商人の街として賑わった 17 世紀から 19 世紀半ばにさかのぼる。

住吉大社には主神を祀る 4 つの本宮の他に様々な神を祀る末社（マツシャ）がある。18 世紀になると、大阪の商人たちは、旧暦の 12 日制に基づいて決められた毎月最初の「辰の日」に、3 つの末社を訪れるようになった。この風習は、「最初の辰」を意味する「初辰」を別の文字で書くと、「発達」や「成長」を意味するという、言葉遊びに由来している。これらの 3 つの末社は農耕の神を祀っているが、田植えと刈取りの例えをビジネス一般にも適用するように拡大した。

毎月の祭事

1900 年代初頭に小さな浅澤社が加わり、現在では、初辰まいりの参拝は、4 つの末社で行われる。住吉大社のウェブサイトに掲載されている毎月の初辰の日に、参拝者は各末社（種貸社、楠珥社、浅澤社、大歳社）を順番に回り、祈願とお供えをする。浅澤社と大歳社は住吉大社の境内からすぐの場所にある。初辰まいりの日には、食べ物やお土産を売る屋台が出て、お祭りのような雰囲気になる。

この儀式をさらに発展させたのが「みのりまいり」である。「初辰まいり」を行う参拝者は、種貸社で粃種を買い、楠珥社で稲穂の束と交換し、大歳社でその稲穂を住吉大社の御神田で栽培された米の小袋と交換することができる。これは「一粒万倍」という一粒の粃が育って万倍にも実り稲穂になるという言葉にちなんだものである。ご利益を得るためには、参拝者は一粒万倍の日（この日もウェブサイトに掲載されている）に米を炊いて食べる。

4 年間（48 か月間継続して）、毎月「初辰まいり」を行った場合、その繁栄は一生続くと言われている。これは「四十八辰」という言葉が「最初から最後まで成長し発展する」という意味を持つ神聖なダジャレに由来している。